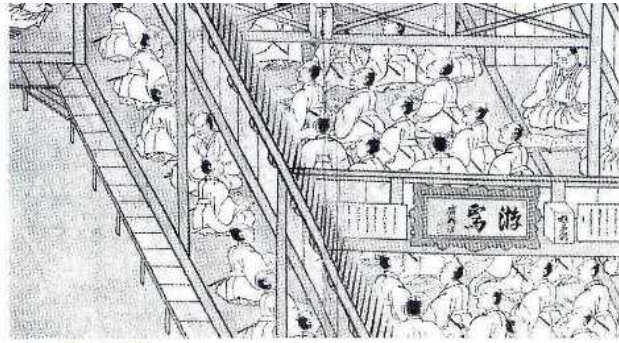


須賀川の故旧に示す  
多年落魄風塵を逐ふ  
璞玉沾らず幾許の春



昌平學門所

十五にして家を出て三十に  
ときを受けた情景である。  
して返れば  
故郷の人異郷の人に似たり

## 先祖は須賀川城主 二階堂家の分家

この詩は、のちに湯島学門  
所（幕府の学校昌平學）の教  
授となった漢学者白井北窓が

北窓は、文政四年（一八二

# 須賀川の人物史

31

昌平學で勤王志士を育てた

白井北窓（一八二二〜一八七七）

二十七歳のとき、我が国への  
外国からの侵入を心配して、  
白井八郎右エ門の長男として  
単身蝦夷（北海道）に渡り、  
生まれた。幼名・佐一郎、名  
北方の事情を視察しての帰り  
に、郷里須賀川に立ち寄った  
を篤治といった。  
家業は定かではないが、彼



北窓の著書「幼學便覽」

が明治二年に出版した「養蚕  
新書」の序文に、余も亦岩城  
須賀川の人也素より蚕事に精  
し」とあることから養蚕関係  
の仕事をしていたのではない  
かと思われる。

町人の子、北窓がどうして  
江戸末期の志士たちと尊王攘  
夷論を交わし、近代日本の礎  
となったのか、それは彼の家  
柄と子供のころの環境にあっ  
たと思われる。

白井家の先祖は、須賀川城  
主二階堂家からの分家で、二  
階堂家の守護神鎌足神社（中  
宿）の祭主を代々勤めていた。  
江戸時代、北町に移ってか  
らは鎌足神社祭礼の神輿渡御  
のときは、昼飯の宿になって  
いたという。

## 隣家の吉田柳陰から 教えを受ける

また、白井家の隣家は、北

町庄屋吉田家で、当時、漢学  
者として知られていた吉田柳  
蔭（一八〇〇〜四一）がいた。

北窓も、子供のころから、  
勉強が好きであったといわれ  
ていることから、家業の傍ら、  
柳蔭について漢詩などの教え  
を受けていたのではないかと  
思われる。

## 15歳で上京

## 安積良斎に師事

十五歳のとき、父八郎右エ  
門が他界。彼は志を立てて上  
京し、朱子学派の儒者松崎謙  
堂（一七七一一〜一八四四）の  
門を叩いた。その後、二本松  
藩出身の昌平學教授安積良斎  
（一七九一一〜一八六〇）に師  
事。経書（四書五経の類）と  
漢詩について学んだ。

彼はまた国事について大志  
を抱き、前記の蝦夷地視察後、  
外国からの侵入に対しての海  
防策をたびたび幕府に進言し  
たという。このような動きの  
中で、彼は、同志の清川八郎、  
安積五郎などと共謀して横浜  
港に停泊中の外国船焼き打ち  
を企てた。が、事前に発覚し

て未遂に終わった。事件に加わった者で捕えられた者もいたが、北窓は幸い免れることができたという。

## 湯島学門所の 教授には42歳で

文久三年（一八六三）、四十二歳のとき、湯島学門所の教授に迎えられた。その翌年、

甲府（山梨県）徴典館の学頭に任命された。が、まもなく王政復古（慶応三年・一八六七）で江戸に戻り、小石川に私塾日新堂を開いた。塾生の中には、会津や鹿兒島出身の者も多く、百人を超したという。

## 水戸・徳川斎昭の 知遇を得る

北窓は、水戸烈公德川斎昭（一八〇〇〜六〇）の知遇を得て、小石川の屋敷に招かれ、たびたび酒席を共にして、かなりの酒豪であったという。將軍徳川慶喜（一八三七〜一九一三）に謁見したときも、酩酊した状態で、相対したと

伝えられている。

明治十年二月に、西郷隆盛（一八二七〜七七）が起こした西南の役では、鹿兒島出身の日新堂の塾生は故国存亡のときとして郷里に帰り、また会津出身の者は官軍に加わり、寢食を共にした塾生たちも敵味方に分かれて戦った。このような動乱の最中、七月十四日、北窓は五十七歳の生涯を閉じた。

## 知人・子弟によって 金龍寺に功德碑が

彼は生前火葬を嫌っていたので、遺骸は、そのまま浅草、智光院に葬むられた。明治十二年二月、子弟、知人によって功德碑が浅草高原町（現寿二丁目）金龍寺に建てられた。碑の篆額は山岡鉄舟が書き、三島中州が選文して、高橋泥舟が書いた。また裏面には、中村正直が人物評を書いたが、この碑は、大正十二年の関東大震災に遭い、現存していないが碑文の写しが残ったことは不幸中の幸いであった。

（永山祐三）

# 須賀川の人物史

集古十種を編纂した画像

白雲

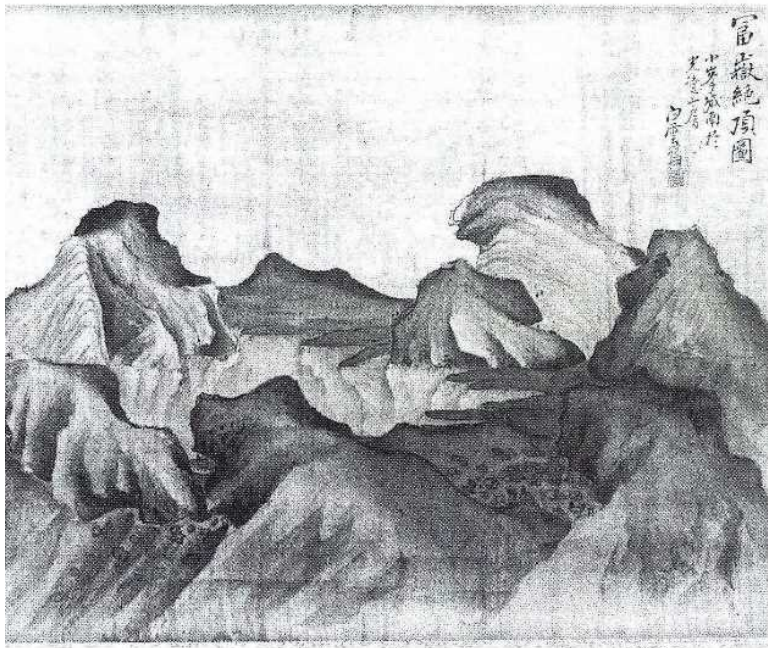
(一七六四〜一八二五)

32

白雲は、白河藩主松平定信（楽翁、一七七五〜一八一九）が、かねてから計画していた、我が国最初の美術工芸図鑑「集古十種」（鐘銘・碑銘・兵器・楽器・書・画・印章・扁額・銅器・文房）の編纂員として、全国の神社・大名家・民間所蔵者を訪れ、模写や拓本に取って、八十五冊の大集成を成し遂げたスタッフの一人であった。ちなみに編纂に携わったのは、谷文晁をチーフとした、白雲、大野文泉、喜多武清、安田田駒、森川竹窓ほか白河藩御用絵師たちで、約十年の歳月を要した。

## 15歳で仏門に入る

白雲の出生については、現在までの調査では不明であるが、十五歳の安永八年（一七七九）、道場町（現池上町）、浄



「富岳絶頂図」(享和年間の作)

土宗十念寺、十八世良進上人の弟子となり、法号を良善教順と称して仏門に入った。白雲は彼の画号であるが、ほかに、松堂、竹堂、墨痴、蝸牛庵などの号がある。また、集古十種の資料収集が終了した享和年間、松平定信は、その労をねぎらい、「閑松堂」の堂号を贈った。この定信自筆の堂号は、今も十念寺に伝えられている。

## 後見人は

### 大庄屋市原綱稠

白雲は、その後、二十五歳のとき、十念寺十九世住職となり、三十五歳までの二十二年間、十念寺で、絵の制作や集古十種の資料収集にあたり続けた。しかし、彼が画家として、定信に認められ、集古十種編纂員になったことについての記録は見あたらないが、その陰に、道場町大庄屋市原綱稠（一七五四〜一八一六）がいたからではないか？

綱稠は、定信からの信頼も厚く、郷土本務、慰斗目馬上羽織の着用、持槍を許され、藩士の列に加えられていた。また御用商人として、藩にとつて重



白雲肖像画（安田田駒筆）



集古十種（碑名）の愛宕山板碑拓本

要な人物であった。十念寺と市原家は菩提寺と壇家の関係にあった。これらのことから、定信に起用されたものと思われる。

## 洋画風の遠近法と

### 高遠法を取り入れる

十念寺時代の白雲は、最初漢画風の画を描いていたが、

寛政四年、谷文晁が白河藩御用  
絵師として招聘されてからは、  
白雲の画も文晁が取り入れた  
洋風画の遠近法と高遠法によ  
って描かれた。この技法は、  
のちに集古十種の資料収集の  
傍ら、各地の風景などを写生  
したときに生かされている。

鏡石町鏡田、西光寺（総代鏡  
沼村大庄屋、常松敷紹（市原  
綱稠の弟）の依頼で制作した  
杉戸二十面に「滾煙閣功臣画  
像（十二面）」「牡丹に孔雀の  
図（四面）」「岩に牡丹の図（四  
面）」の作品がある。現在、こ  
の杉戸絵は、県指定重要文化  
財になっている。

また、「岩瀬郡須賀川町耕地  
之図」は高遠法による鳥瞰図  
で描かれ、当時の町絵図を代  
表するものである。

## 白河藩御内寺で

## 編纂に専念

集古十種の編纂も大詰めに  
近づいた寛政十一年、定信は  
白雲を白河藩御内寺常宣寺二  
十二世として迎え、編纂に専  
念させた。十一年と十二年の  
二度にわたり、白雲を関東以

西、四国地方へ収集の旅に出  
した。このとき各地の風景な  
どを精力的に写生した。その  
主なものに「東海遊覧」「西々  
遊行誌」がある。このほかの  
写生帖には「富岳絶頂の図」な  
どもあるところから、富士登  
山もしたと思われる。この写  
生は、のちに本絵として描か  
れて今に伝えられている。

寛政十二年（一八〇〇）、集  
古十種が刊行の運びとなった。  
定信は、これを翌享和元年四  
月、將軍家齊に献上した。  
その後、白雲は文化三年か  
ら九年まで、栃木県黒羽町常  
念寺に滞在。同年十一月、四  
十八歳のとき、秋田県六郷町  
本覚寺に住職として移り、制  
作の傍ら、各地を写生して歩  
いていたことが残されている。  
写生帖から知ることができ  
る。一生の大半を資料収集と写生  
にかけた白雲は、文政八年（一  
八二五）、本覚寺で、その生涯  
を終えた。六十一歳であった。

（永山祐三）

現在、白雲の作品は、江戸  
画壇の「洋風画」として重要  
な位置を占めている。

# 中町、茂兵衛の長男として生まれる

秋風や一盞の酒にひびきあり  
草太郎

この句は、俳人道山草太郎

の作で、桔槔吟社が昭和五十年、俳誌「桔槔」の六百号を記念して、神炊館神社参道に建てた句碑である。  
彼は、明治三十年（一八九

七）二月十七日、東六丁目十三番地（現中町）商業道山

茂兵衛の長男として生まれた。

幼名を守三と称したが、十一歳のとき、父と死別、家督を相続して名を茂兵衛と改名した。

# 竹久夢二と親交が

特に、終生の語り草にして

その後、県立安積中学校に入学。大正三年（十七歳）、早稲田大学に進学したが、大正七年、中退して帰郷、家業を継いだ。この時期、彼は多く

いた人物に竹久夢二（一八八四〜一九三四）がいた。夢二はアール・ヌーヴ的な独自の夢二式美人画を描き、大正ロマン画家として一世を風靡

の師と友人を得たのであった。

# 須賀川の人物史

33

桔槔吟社創設の一人

# 道山草太郎

（一八九七〜一九七二）



50歳ごろの道山草太郎

した。夢二は旅行が好きで各地を訪れ、旅先では遊興に明け暮れて金が無くなると、旅館で絵を描き、知人に金策を頼んだという。夢二は、福島県内のうち、三春、船引、福島、若松、喜多方、東山などに数回来っていた。このとき旅行の拠点である郡山には、宿泊することも多く、ここでの金策は草太郎に頼んだこともあって、須賀川市内には十数



夢二作の「黒船屋」（大正9年）

点の夢二の作品が好事家の間にもたらされた。しかし、昭和三十年ごろから夢二ブームになり、多くの作品は東京の画商の手によって流出したが、残された作品をみると、草太郎と夢二の交友関係を知ることができると、また、吉田絃二郎（一八七六〜一九五六、小説家、随筆家、早稲田大学講師）からは、

宗教的感情からの人生や自然に対する愛情についての教えを受けた。これらは、草太郎俳句の中に溶け込んでいったものと思われる。

また、吉田絃二郎（一八七六〜一九五六、小説家、随筆家、早稲田大学講師）からは、宗教的感情からの人生や自然に対する愛情についての教えを受けた。これらは、草太郎俳句の中に溶け込んでいったものと思われる。

# 大正10年

# 乙夜会に入会

大正十年、須賀川銀行に勤めていた草太郎は、乙夜会（広

# 原石鼎を生涯の師に

十一年五月、楢郎、草太郎、破籠子が投句していた「鹿火屋」の主事者原石鼎を牡丹園に招き、句会を開いた。このとき、桔槔吟社結成の運びとなった。創立同人は前記の三人と岡部句童、現在九十九歳

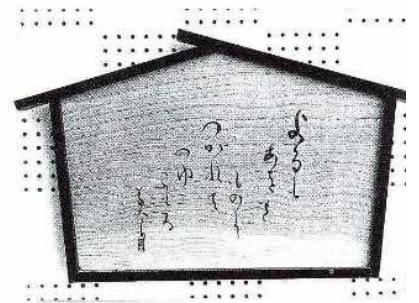
の竹内翠玉（憲治）ほか四人の九人であった。以後、草太郎は石鼎を生涯の師として敬慕し、村上鬼城や渡辺水巴を知り、研鑽を積んだ。また、芭蕉についての研究も深く、昭和十一年、俳誌

鹿火屋に五回にわたり「芭蕉雑記」の論文を寄せている。この論文は彼の当時の心境を述べているようにも思える。

### 戦時中は桔槔を がり版刷りで発行

この年以降、松島瑞巖寺僧

堂で、約十年間参禅修業を続



道山草太郎の俳句絵馬

けた。この間、大東亜戦争による統制経済で、桔槔の印刷、製本ができなくなったとき、彼はがり版刷りで発行し、二十三年の復刊まで休むことなく続けた。これが七百七十五号続けてきた桔槔の歴史の一コマである。

現在、会員は約六百人、会長は高久田橙子が受け継いでいる。

### 須賀川文化協会 創設に尽力

戦後、草太郎がまず手掛けたのは「須賀川文化協会」の創設であった。これが現在の須賀川文化団体連絡協議会と発展して、初代会長に推挙された。また、牡丹園保勝会の設立に尽力し、記念碑の撰文をしている。

このほか、須賀川市社会福祉協議会長、須賀川市町内会長、須賀川観光協会会長などを務め、昭和四十七年（一九七二）二月十三日、午前六時二十分、七十五年の生涯を閉じた。遺体は、遺言によって献体し医学の上に貢献した。

死の前日、草太郎の病床を見舞った桔槔の俳人たちに書き取らせた「七十五じゃものもうよかろうと寒の水」が辞世の句となった。

これは、飄飄とした風貌の中から計りしれない博識をにじみ出していた、彼の人柄をしのぶことができる。

（永山祐三）



綱稠像

# 須賀川の人物史

江戸末期須賀川の隆盛を図った商人

## 市原貞右衛門綱稠

34

### 天明の大飢饉で貧民を救済

天明二年(一七八二)から五年間続いた天明の大飢饉で、須賀川地方も大きな被害にあったとき須賀川町会所では、飢饉対策としての困米を貧民に対してどのように吐き出すか、また町益金の有効な運用について、慈善の心情と

商人の本領を發揮したのが、道場町(宮先町)大庄屋市原貞右衛門綱稠などの町会所役人であった。

この時、町会所では、領主の白河藩主松平定信が打ち出した救済策を即実行に移し、田地開拓、道路改修などの土木事業や年貢の二〇%削減を行ったため、須賀川地方では百姓一撥や打ち壊しなどが起こることもなかった。

### 寿稠の長男 幼名を勝之丞

綱稠は、宝暦四年(一七五四)、道場町で酒造業などを営む傍ら、三役(検断・庄屋・問屋)を勤め、町会所役人として、須賀川の司法、行政、経済面に携わっていた市原貞

右衛門寿稠の長男に生まれた。幼名を勝之丞といった。

### 寛政2年、定信から御内用達(ごないようたし)に任命

安永六年、父と死別した彼は、七年(一七七八)二月に、家督と三役を相続して、独礼假名披露を許され、幼名を改め、貞右衛門綱稠と称した。二十三歳のとき、大庄屋席につき、

ちなみに、この飢饉で老中田沼意次は、みるべき具体策を出せず失脚し、白河藩主松平定信が老中の座についた。

### 42歳で 白河藩士の列に

その後、郷土本務と持鎗を許され、八年、四十二歳のとき、慰斗目馬(いとうめうま)上羽織の着用を許されて白河藩士の列に加えられた。当時、これは町人にとっては最高の榮譽であったであろう。

彼は、白河藩のほか次の各藩から知行などを賜ったという。

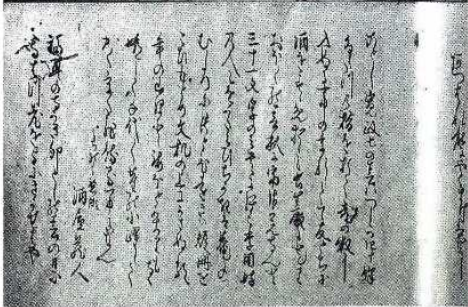
- 守山藩松平家、知行百石、現米三十俵
- 二本松藩丹羽家、知行百五十石
- 高田藩神原家、現米百俵
- 三春藩秋田家、知行百石

これらは、綱稠が、市原家が代々営んできた米穀と塩の取引、それに酒造業を基礎として経済的に発展させて、白河藩、守山藩などの御内用達に任ぜられ、各藩の財政再建に経済的協力をしたからであった。

白河藩、守山藩では市原家に対する財政的な拠り所として赤子養育金を信託、その利子で事業を行っていた。

### 妹の多代女に 俳諧を勧める

綱稠は、経済的、行政的な



初老年祝い狂歌集「福寿草」酒屋蔵人刊

手腕のほかに文化面にも活躍している。二十二歳年下の妹、市原多代女が心身症に陥ったときに、俳諧の道に入ること勧め、江戸末期の女流俳人として大成させた。(広報すかがわ昭和六十三年五月号・「須賀川の人物史」参照)。

## 画僧白雲も 綱稠の援助が

また、江戸洋風画壇に足跡を残した画僧白雲も彼の後援によるところが大きかった(広報すかがわ平成二年八月号・

「須賀川の人物史」参照)。白雲の作品で知られている「須賀川町耕地之図」は、町会所で領主が領内巡視に来たときの説明用に制作させたものと思われる。この裏付けとなる資料が、須賀川市史近世編の資料調査のとき、市原家蔵

町会所関係文書の中から、耕地の図の下絵が発見されたことによつてうかがうことができる。ほかの画家や文人たちも残されている資料や作品などから、彼との交流を知ることができるとができる。

## 綱稠も酒屋蔵人と 号し狂歌を詠む

綱稠も、号を峯齋亭蔵人、酒屋蔵人として、狂歌を詠んだ。四十二歳の初老の年祝いとき、江戸の狂歌師浅草庵市人や、桑葉庵千則、曼鬼武などからの多くの祝歌と浮世絵師窪俊満の挿絵で狂歌集を出版した。また、江戸や地方の狂歌集と石井雨考編の「青蔭集」などに歌が入集されている。

天明から文化年間の約三十五年間、須賀川の各方面に献身的に貢献した綱稠は、文化十三年(一八一六)二月二十一日子上刻(午前〇時ころ)

伽し給ふ人々へ

我は今日此世をさけの魚ならて  
ひとつの命をひろひけるかな

を辞世の歌として、六十二歳の生涯を終えた。(永山祐三)





田善作「洋人曳馬図」(真重文)

## 小倉村講中が 満福寺に奉納

今から百八十八年前の享和二年(一八〇二)、東堂山満福

詣人たちは感嘆の声を挙げたものと思う。

この絵馬は、農耕や林産などで馬と苦楽を共にしていた小倉村(現須賀川市大字小倉)の人々が、前記の東堂山の講

## 須賀川の人物史

35

田善の絵馬を奉納した世話人

山田仙吉(一八〇九)

寺観音堂(田村郡小野町大字小戸神)の長押しに、地方の人が見たこともない油彩画の「洋人曳馬図」の大絵馬が掲げられた。この時、ほかの絵馬は圧倒され、これを見た参

中を作り、亜欧堂田善(広報すかがわ昭和六十四年一月号「須賀川の人物史」参照)に依頼して奉納したものである。図柄は、ドイツの銅版画家ヨハン・エリアス・リーデン

が「作」銅版諸国馬図」から「プロシア馬の図」の馬と御者の姿態をとり「トルコ馬の図」の鞍と弓矢などを引用して、そこに田善なりの構成と彩色によって制作された。画面に「奉納、享和二年七月吉日、岩瀬郡小倉村講中」とある。この絵馬は、江戸洋風画を代表するもので、昭和十五年、福島県重要文化財に指定された。

現存する田善の  
絵馬は全国で2点

田善作の絵馬は、記録にあるもの二点、現存するもの二点の四点であるが、記録の二



小倉油池近くの石灯ろう

点は焼失したものである。また、東堂山観音堂も、大正五年、火災に遭ったが、田善の絵馬だけ下の本堂に移しておいたので幸い難を逃れたという。

ここで私事になるが、昭和三十七年十一月、東堂山を初めて訪ね、絵馬を拝見した。このときから、小倉村講中とは、どのような人たちであったのか? 以後、各種の調査の機会に裏付けになる資料を探していたところ、昭和六十三年、須賀川水道五十年史の資料収集のとき、小倉油池近くの供養塔群の中の、石灯ろうに「奉納、東堂山、享和二年三月吉日講中 埋平三人、中作二十六人、世話仙吉、平次郎内老人、三十人」と銘文のあるのを発見した。

この年号は絵馬と一致するものであり、絵馬を奉納した記念と部落内でいつでも参拝

できるようにと建てられたと思われる。

## 仙吉は小倉の

### 山田一徳さんの先祖

その後の調査によって、世話人仙吉は、小倉字前仲作八十五、山田一徳さんの先祖で文政十二年（一八二九）に没している（生まれ年は不明）。また、石灯ろうの建っている土地も同家の所有地で、小倉字高田一五〇である。山田家は代々、神仏の信仰心が厚く、東堂山や出羽三山参詣の世話をしていたといわれている。

江戸時代、小倉地区は四つの組に分かれていた。二番組仲作は山吹、滑津、後仲作、前仲作の部落で組織されていた。ちなみに二番組は、慶安三年（一六五〇）戸数十四戸、明治四年（一八七一）戸数二十九戸であるところからみると、享和二年に絵馬を奉納したときには、全戸の戸主が講中に参加したと考えられる。

小倉地区には現在、東堂山灯ろう三基、東堂山供養塔一基、馬頭観音供養塔四十三基がある。  
（永山祐三）



**須賀川羽子板** 地方で作られた羽子板の中では、全国一の生産規模を誇った。写真は一番型の羽子板で七福神の図柄(大きさ約1m)

## 色彩の鮮やかさ 生産量とも日本一

須賀川羽子板は、あまり一般の人たちには知られることもなく、一部趣味人の間で話題にのぼるくらいである。しかし、平凡社刊「世界大百科辞典」羽子板の項に、人形・玩具研究家の山田徳兵衛氏が「福島県須賀川などでは最近まで左義長(正月十五日に、青竹を立てて正月の飾り物を燃やした宮中の儀式)の羽子板を産していた」と、全国でただ一か所産地として特記してい

る。それは各地の羽子板に比べて、大きさ、絵付け、生産量が勝っていたからであろう。

須賀川羽子板は、明治十年ころから四十年代の約三十年

いわれている。

本来ならば、製品の名称は産地名を付けるのが通例であるが、当時の須賀川は、県内の物産の集産地であったので、

# 須賀川の人物史

須賀川羽子板生みの親

樽川源朝

（一八五七〜一九一六）

36

間、旧西袋村、大桑原・樽川源朝、袋田・樽川義丸、旧柱田村(現岩瀬村)・佐藤峯治によつて明治中期ころの最盛期には年間、三万枚生産したと

流通機構上、須賀川の間屋を流して各地の業者に卸されたことから、通りのよい名称にと付けられたのが「須賀川羽子板」であった。

源朝が羽子板作りを始めたのは、明治十二、三年ころといわれている。この時期、彼に長女が生まれ、祖父譲りの器用さで、娘のために作った

各地の「歳の市」に出荷し、新年に女の子の初正月祝いに座敷に飾られ、大好評を得たという。

## 長女の誕生祝いに 作ったのが最初

なぜ大桑原の農村部で羽子板作りが行われるようになったのかについての記録などは残されていないが、羽子板生みの親、樽川源朝は、安政四年(一八五七)七月七日、大桑原村字日向百二十八番地、農業樽川伴右工門の長男として生まれた。

このころ、源朝の祖父源重(一八二四〜一九〇〇)は、西川地区で盛んであった地芝居の髪を作り「髪屋」と呼ばれていた。明治九年、朝日稲荷神社に奉納された芝居絵馬に「髪師樽川源重」と記されている。

## 「歳の市」に出荷 大好評となる

源朝が作った初期の羽子板が数点残されている。これらの絵付けは手描きで大きさは五十センチくらいである。その後、人気が出て量産を余儀無くされ、農閑期には近所の人たちを雇い、絵付けも「合羽版(シルクスクリン)」を取り入れて、色彩の鮮やかな、七福神などの目出度い図柄を多く描き、大きさも三十七センチから一メートルまで数段階のものを作った。それを

羽子板がきっかけとなったのではないかと思われる。

当時、須賀川は宿場町として栄えており、東京製の質の良い押し絵や描き絵の羽子板も移入されていたことである。が、これらは高価で農家や町の人々には手が出なかつたので、安価で見栄えするだれも喜んで迎えらるる物が求められていたのではないか。

## 明治中期には 年間3万枚の生産

羽子板の需要も順調に伸び、事業拡張の話を大桑原村、袋田村両村の戸長（村長役）をしていた大桑原村新田、二階堂正武（一八三四〜一八九四）にしたところ、正武は元修験

者同士で親交のあった袋田村本郷、樽川義丸（一八五九〜一九二五）と弟の佐藤峰治（一八六三〜一九一七後に柱田村に行き佐藤姓となる）に羽子板作りを勧め、源朝から習って製造に参加した。

製造元が三軒になって明治中期には年間約三万枚の生産量になったと言われている。

生産量が多くなるにつれ、図柄も時代を反映して美人画や福の神のほか、日清、日露戦争のときには明治天皇と皇后、軍人などの絵も描かれた。

## 押し絵や描き絵に 市場を奪われる

このように順調な生産を続けていた須賀川羽子板も、明治三十五、六年ころ、東京から新しい正月商品、祝い掛け物が須賀川をはじめ、各地に出まわり、羽子板と一緒に店頭で売られた。このころから贈り物も羽子板から掛け物へと変わり、羽子板も下り物の華麗な押し絵や描き絵の物に市場を奪われた。明治時代、女の子の初正月の贈り物として関東、東北地方各地の店頭を賑わした須賀川羽子板も大正初期には、その姿を消したという。

現在、須賀川羽子板は日本玩具史上、高く評価されており、現存している羽子板は地元市立博物館や東京国立博物館、その他各地の博物館、民芸館収集家などに約百枚保存されている。

（永山祐三）

ルといわれている安積覚兵衛  
覚である。

## 覚の祖父は

### 二階堂盛義の一族

安積覚について、明治時代

中学校で使われた標註漢文教  
科書の中に「第四十 飄筆  
澹泊」

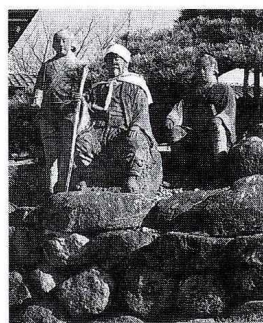
安積覚（安積覚、字子  
先、通称覚兵衛、号澹泊、岩

代須賀川ノ人博学能文最精於  
史学水戸義公之編大日本史覚

為之総裁（以下略）。本文は飄  
筆と題して中国地方の大名、

大内、大友、毛利家などに  
いて述べたものである。

また、水戸市松本町にある



水戸黄門一行の石像(水戸市、桂岸寺)

安積君墓」、側面には「安積氏  
先居奥之須賀川城大父覚兵衛  
正信（以下略）」とある。

覚の祖父、覚兵衛正信（一  
五八四〜一六五七）は、二階

堂盛義の一族で、飯土用城（天  
栄村）の城主飯土用氏であつ

た。が、落城後、妻の出身地  
（安積郡日和田村）の安積を氏

姓として流浪し、はじめ信州  
松本の小笠原家、次ぎに会津

の蒲生家に仕えたが、城主忠  
郷の政策について行けないこ

とを知り、その後江戸に出て、  
水戸徳川初代藩主頼房に三百

石をもって抱えられた。その  
後百石加増されて四百石とな

り、鎗奉行を勤めた。

父、介之允貞吉（一六二九  
〜一六六六）は家督を継ぎ、

四百石をもって二代藩士光圀  
（義公）に仕えた。儒学を好

み漢文著述に抜きんでいて、  
義公の信頼も厚かったが三十  
七歳の若さで没した。

## 10歳で

### 朱舜水の門人に

本号の人物、覚兵衛覚は、

明暦元年（一六五五）、貞吉の  
長男として生まれ、彦六と名

付けられた。このころ光圀は、  
水戸藩の学問の中心である彰

考館を開設し「大日本史」編  
さん事業に着手した。ここか

ら「水戸学」が生まれ、培わ  
れた思想が水戸藩の家風とな

り、幕末の勤王思想から近代  
日本の進むべき方向を定めた

という。

寛文五年、光圀は明（中国）  
の儒者で、長崎に亡命してい

た朱舜水を水戸藩に招いた。  
この時、十歳の覚は、光圀に

願い出て江戸に上がり、朱舜  
水の門人となって勉学に励ん

だ。光圀は彼の精進ぶりを賞  
し、書籍代として金三両を与

# 須賀川の人物史

37

彰考館総裁・「水戸黄門漫遊記」の格さんのモデル

## 安積覚兵衛覚

天正十七年（一五八九）十

月二十三日、須賀川城は伊達  
勢によって落ちた。その後、

城主二階堂家の一族や家臣た  
ちは、それぞれの運命の道を

歩んだ。

その中に、現在でも我々の

前に現れる人物がいる。この

人物は、TBSテレビが昭和四  
十四年八月から放映している

茶の間の人気番組「水戸黄門」  
の主人公、徳川光圀（一六二

八〜一七〇〇）の供として活

躍している「格さん」のモデ

水戸藩士だけが葬むられてい

る常磐共有墓地に建てられて  
いる彼の墓碑は、孫の覚兵衛

直行が建立し、友人の小池友  
賢が約六百三十文字の碑銘を

撰文している。碑の高さ、一

尺十寸で正面に「故老牛居士

えたという。

寛は十五歳のとき、二百石を賜り大番組となった。その後、小納戸役、唐物奉行を経

て天和三年（一六八三）、彰考館のスタッフの一員に加えられた。

この年、同僚の佐々宗淳（一

六四〇〜一六九八、通称介三郎、水戸黄門の供「助さん」のモデル）は、史料収集で須賀川代官、相樂家を訪れ「白

河結城文書」の写取を行った。現在、この文書と宗淳の書状は、国の重要文化財に指定されている。

## 彰考館総裁に 38歳で抜てき

元禄六年（一六九三）三十八歳の寛は、彰考館総裁を命ぜられ、大日本史編さんに尽力した。特に、光圀が力を入れた朱子学の歴史観にもとづいた道徳の理法を、歴史の中から正しく学びとるという思想が、彼の中でもはぐくまれ、体力と能力は衰えを知らず、七十八歳まで編さんに携って、大きな業績をあげ、「水戸学」の祖といわれている。

享保十八年（一七三三）三月二十日、三代藩主綱条は、寛に多年の彰考館勤務をねぎらい時服を贈った。彼もこのとき退き「老牛」と号して余生を送ったが、その合間に十人の合力（助手）を供にして彰考館の手伝いをしたという。この事業は歴代藩主によって受け継がれ、明治三十九年、完結まで二百五十年を要した。

一生を大日本史編さんと水戸学の確立に尽くした寛は、元文二年（一七三七）十二月十日、その生涯を終えた。八十二歳であった。（永山祐三）

# 須賀川の人物史

38

## 古代から中世編



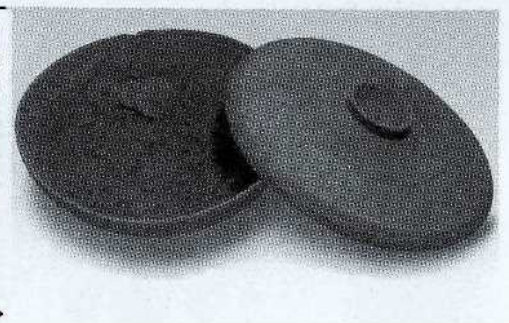
国指定史跡「上人壇廃寺跡」(須二中南側から須賀川駅方面を望む)

昭和六十三年一月号から連載中の「須賀川の人物史」は、三月号で一応終了させていただきます。これまで円谷英二特撮監督をはじめ三十七人の方を紹介してきましたが、いずれも大変ご好評をいただきました。今月号と来月号では、須賀川発展のために活躍された人物をまとめて紹介します。

### 建弥依米命が石背国造に任命

須賀川地方の、人の名が文献の上に現れるのは、五世紀ごろ石背国造に任命された建弥依米命である。その父、建許呂命は石背国造として「国造本紀」に出てくる。

それから約三百年後の養老二年(七一三)、陸奥国から白河、石背、会津、安積、信夫の五郡を分けて「石背国」ができた。国の役所である国



初(昭)和六十三年一月号から連載中の「須賀川の人物史」は、三月号で一応終了させていただきます。これまで円谷英二特撮監督をはじめ三十七人の方を紹介してきましたが、いずれも大変ご好評をいただきました。今月号と来月号では、須賀川発展のために活躍された人物をまとめて紹介します。

府は、国名の地に置かれたことが「続日本紀」に記されている。

### 高月左大弁が石背国司に任命

数年前までは、石背の国府の所在地は不明であったが、昭和三十六年から発掘調査が行われた上人壇廃寺跡、その調査で出土した遺物や遺構から、国府は上人壇廃寺跡にあったことが位置づけられた。このことは、昭和六十一年、

国立歴史民俗博物館発行の研究報告書第十集「古代の国府の研究」で発表された。その後、国府に関連のある遺跡が次々に発掘調査され、昭和六十二年には、中宿「うまや遺跡」から、国府の役人に給料として支給したものと考えられる、我が国最初の通貨「和同開珎」と「胞衣壺」が発見された。

国府の国司は、中央(奈良)から派遣され、郡司を統轄した地方官であった。石背国司に任命されたのは、高月左大弁で、その支配下に前記の五郡が置かれた。当時、国司の任期は六年間で、上人壇に国府が存在した期間はこの間だけであったと考えられる。石背国は、その後「陸奥国」に統合された。

### 吉弥候部上人が磐瀬郡司に任命

「続日本紀」に、神護景雲三年(七六六)、磐瀬郡司に任命された吉弥候部上人が出ています。上人は大領として外正六位上に任ぜられて、磐瀬朝臣の姓を賜った。この磐瀬氏は

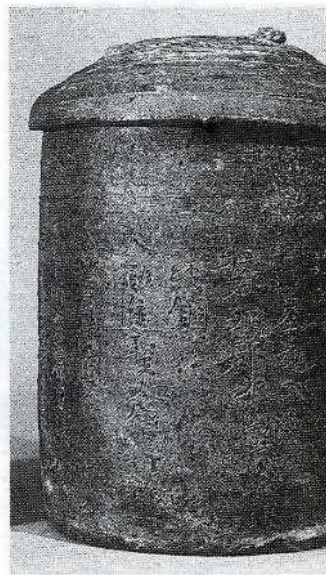
前述の建許呂命の子孫で、人上以来磐瀬郡を支配した。ほかに、上丈部宗成、磐瀬朝臣富主、磐瀬朝臣長宗、大伴宮城連などの名が記されている。

## 糸井国数らが

## 磐瀬庄司の傘下

平安時代になると東北地方は、平泉（岩手県）の藤原氏が巨大な力を持ち、陸奥政府を開府し、鎮守府將軍に任ぜられて陸奥国を掌握した。磐瀬郡もこの支配下にあつて、平泉との交流があつたことを知る資料が、上人壇麿寺跡から発掘された。

これは平泉中尊寺に伝えら



出土した磐瀬郡山寺の重要文化財として指定されている。3号経塚から出土した「陶製外筒」。

れている紺紙金字一切経の軸頭と同時期と考えられる金銅製宝相華文軸頭で、当時を知る一級の資料である。

また、山寺（西川地区）米山寺跡から承安元年（一一七一）、銘の経筒が出土している。この経筒には、経塚を造営した、僧と施主で糸井国数、藤原貞清、白井友包、藤井末遠、の名が刻まれている。この四人は同時期、福島天王寺、桑

折平沢寺にも経塚を造営している。これらの人物は、平泉藤原氏の支配下にあり、地方名主として農業を営む傍ら、武士団を構成し、磐瀬庄司の傘下にあつた者たちと考えられる。

## 川中郷（旧磐瀬郡）は

## 二階堂家の支配下

文治五年（一一八九）、源

頼朝の奥州平定によって、須賀川は鎌倉幕府の奥羽支配の拠点として、その支配に藤原泰衡追討の功績で、岩瀬郡西部は二階堂行村の所領となつた。

行村は岩瀬郡の中央である稲村に築城した。行村は幕府重臣として重用され、常に居城せず、代々、代官を派遣していたと考えられる。この行村を祖とする二階堂家は「稲村二階堂」と称されている。

川中郷（旧磐瀬郡）は、得宗被官の二階堂行朝（行珍）に与えられ、行朝は岩瀬山（現愛宕山）に築城し、守谷館を居館とした。

## 天正十七年

## 伊達政宗により滅亡

FCT「ふくしまの素顔」  
あおつとつてんせん  
「亜欧堂田善、特集」

本市が生んだ偉大な銅版画家・亜欧堂田善の特集が、福島中央テレビ「ふくしまの素顔」の中で放映されます。どうぞご覧下さい。

＊放映日時 3月3日（日）  
正午～0時30分

阿武隈川東部の川東郷は、岩瀬氏に代わって塩田陸奥入道国時の奥州所領支配の拠点が置かれた。岩瀬氏は領地を分断され、下宿郷と二、三の村のみとなった。下宿には顕国魂神社があり、古来から祭主は律令国造の職とされてきた。これら人物によって中世の須賀川地方は統一されてきたが、天正十七年（一五八九）十月二十三日の伊達政宗の攻撃によって落城し、二階堂家四百年にわたった支配は終わった。が、古代から中世にかけて須賀川地方に尽くした人物は多くおり、これらの人たちにについても調査しなければならぬと思われる。（永山祐三）





十念寺境内にある芭蕉の句碑と円内は市芭蕉記念館の芭蕉翁像(谷文中作)



## 石川昭光らが 戦後処理とまちづくり

天正十七年(一五八九)十月二十六日の合戦で、須賀川を

# 須賀川の人物史

近代から現代編

39

## 伊達家支配から 蒲生氏郷の領地

これによって須賀川は、約十か月の伊達家支配から、新

破業と宿駅の整備事業で、現在の市街地の基となった。

## 会津で天下統一の 奥羽仕置きが行われる

同十八年(一五九〇)七月五日、関東の雄北条氏直を降伏させた豊臣秀吉は、十七日に小田原を進発し会津へと向かった。

その途中で江戸城を徳川家康に引き渡し、宇都宮では、北関東諸大名の処遇と臣従を決定して、八月九日、会津若松に到着した。  
ここで秀吉の夢であった天下統一の最後の舞台で、奥羽仕置きが行われた。

## 上杉景勝が まちづくりに専念

慶長三年(一五九八)一月、会津若松城主は、蒲生氏郷から上杉景勝になり、須賀川もその支配下に置かれた。

景勝は、田丸具直からの事業を引き継ぎ、以後表町に四町、裏町に十四町のまちづくりを精力的に行い、その整備は大きく進んだ。

景勝は、このとき諏訪明神(神炊館神社)に石の鳥居を奉納した。(現在あるのは後に再建)

慶長六年(一六〇一)、関ヶ原の戦いで、西軍に荷担した景勝は、会津から米沢に移封されて須賀川も上杉家の支配から離れた。

手中に収めた伊達政宗は四十年間滞在して、須賀川城を石川昭光(石川城主)に与え、戦後処理とまちづくりを命じた。

昭光は、家老の矢吹薩摩を城代とし、与力に稲村二階堂

家の総領保土原江南斎をはじめとして浜尾漸斎、岩淵近江、守谷筑後、矢田野伊豆、横田治部などを置いた。

このとき旧城内を中心にできた基本設計は、須賀川城の

## 須賀川俳壇の基を築いた芭蕉

このころ江戸幕府は、街道と宿駅の整備に力を入れた。須賀川を通っていた当時の国

道は、古代からの「東山道」で街の東側にあったが、新道の開削で「奥州道(街道)」となり、新しい街の表町、南・北に接続されて、宿場町須賀川の機能が発揮できるようになった。

道路と宿駅の整備によって物資の流通も盛んになり、それに伴って旅人も多くなった。江戸時代も中期になると戦

国時代の戦後処理も全国的に治まり、人々も産業や文化娯楽にエネルギーを燃やし、華の元禄時代をつくりあげた。このころから領主や文人墨客・旅芸人たちは、江戸や上方など各地の文化や情報をもつて須賀川を訪れ、町の人々に大きな影響を与えた。その代表的な人物は、相楽等躬が中心となっていた談林

派須賀川俳壇に、蕉風の新しい風を吹き込み、連綿と三百年の歴史をもつ須賀川俳壇の基を築いてくれた松尾芭蕉(一六四四〜一六九四)ではないだろうか。

### 亜欧堂田善は

### 銅板画の先駆者

また、江戸幕府で老中を務

め、寛政の改革を行った白河藩主松平定信(一七五八〜一八二九)は、亜欧堂田善を見出し、銅版画・洋風画の先駆者といわれるまで育てあげた。田善の弟子、安田田駒、遠藤田一なども藩の御用絵師として抱えた。

この時期は、須賀川の江戸文化が華を開いた爛熟期で、茶人の一機庵宗仲、彫刻家の佛師左門、漢学者の吉田柳陰、江戸に出て検校の位にまでなつた岩瀬検校がいる。岩瀬検校のことは定信の退閑雑記にも記してある。

## 須賀川の人物史終了

これまで、須賀川の人物史として三十九回にわたり掲載してきたが、この中には須賀川で終生過ごした人、須賀川に生まれて外に出た人、外から来て須賀川を終の住み家とした人たちがいる。

須賀川には、このほか各分野に尽くした人々が多くいるが、これらの人物については今後の課題としたい。

(永山祐三)